The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第2回多言語翻訳プロジェクトについて
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61316
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第２回多言語翻訳プロジェクトについて

合山　林太郎

日本文学多言語プロジェクトの実施は、2012 年に引き続き２度目となる。今回は、大阪大学大学院文学研究科の留学生に加え、言語文化研究科やドイツのハイデルベルク大学から大阪大学へ留学中の学生にも参加してもらい、計１１言語への翻訳が可能となった。熱意をもって翻訳作業に取り組んでくれたプロジェクト参加者、また、それをサポートしていただいた関係の方々に、心より感謝申し上げたい[1]。

今回の翻訳対象となる『セメント樽の中の手紙』は、葉山嘉樹の作品の中で最もよく知られた作品である。ただ、筆者にとって、その語彙レベルでの内容理解は意外に難しく、セメント製造に関する専門的な用語の意味や俗語の位相など、説明に窮する場面がしばしばであった。こうした類の言葉の翻訳に問題があるとすれば、それは、筆者の説明が十分でなかったことに起因する可能性が高い。

また、別の意味で、言語化しての説明が難しい箇所もあった。自身の恋人の死について述べる「立派にセメントになりました」という女工の言葉などは、その一例と言えよう。この表現に接して、筆者がまず思い起こすのは、たとえば、戦時中にしばしば用いられた「立派に戦死する」という言葉である。多くの場合、それはある種の葛藤を含んだ表現であり、言葉の対社会的な意味とは逆の、話者の私的な感情、すなわち哀しみなどを想像し把捉する必要がある[2]。女工についても同じことが言えよう。ただ、「立派にセメントになる」という言い方には、戦死の場合と違い、何かしら“奇異”の感があり、それが、この作品に独特の色彩を添えていることも否定できない。こうした言葉のうちに潜む様々な文脈やイメージについて、過不足なく情報を提供することができたかどうか、なお確信は持てていない。

『セメント樽の中の手紙』は、現在にいたるまで日本の高等学校の国語教科書に収録されてきた。すなわち、教育の中で読まれることの多い作品である[3]。

---

[1] とくに日本近代文学専攻の斎藤理生先生、グローバル日本研究クラスターの入江幸男先生より、様々なご教示、ご支援を賜った。厚く御礼申し上げる。

[2] この問題については、高橋哲哉『靖国問題』（筑摩書房〈ちくま新書〉、2005 年）第１章より示唆を得た。

[3] 阿武泉監修『教科書掲載作品 13000－読んでおきたい名著案内』（日外アソシエーツ、2008

そして、教育の世界では、この作品に「労働者の連帯」を読み取る傾向が強いようである。『筑摩書房版「国語総合」学習書（国語 323)』（協学出版）に、本小説の「構成・要旨」について、「労働者の悲惨な状況を描き、労働者同士の連帯を願っている」と記されているのは、そのよい例と言える。

一方、文学研究においては、女工の手紙の部分をはじめとして、テクストから様々な可能性を引きだそうとする議論が盛んに行われている。具体的に言うならば、悲痛な内容を記しながら、手紙の読み手との間合いを巧みにつめる女工の文章は一体何なのか、そもそも女工の手紙は与三にのみ届いたものなのか、宛名の記されないこうした手紙は他に何通も出されていたのではないか[4]など、手紙の差出人の意図や有り様をめぐって、いくつかの新たな解釈が試みられている。

本プロジェクトでは、多様な読みの可能性に目を向けるのと同時に、多くの日本人読者はこの小説をどう受けとめてきたか、ということを意識しながら翻訳を行った。

おそらく大多数の読者は、セメント工場における事件の凄惨さ、人間の肉体の入ったセメントという表象が持つ不気味さ、女工や与三をめぐる状況の過酷さといった点に目を留めながら、この小説を読んできたと考えられる。

また、とくにこの小説における、奔放とも言える着想と豊かなイメージとは、読者の印象に強く残ったと思われる。時代を遡るならば、「不景気のどん底」であり、「軍部の政治支配が着々進行してい」る「重苦しい底知れぬ暗さ」を持った時期に発表されたこの小説に対して、「ロマンチックなみずみずしさ」を覚えたという、臼井吉見の証言（『文芸』1947 年 9 月）がある。近年では、「この女工の手紙を含め、小説は労災の事実を描いたリアリズムではなく、労働の実態をめぐる悲惨なファンタジーである」（『葉山嘉樹　セメント樽の中の手紙』〈角川文庫、2008 年〉、「作品解説」）といった、浦西和彦による評価もある。

なお、翻訳対象作品の選定にあたっては、言葉や文化の壁を超えて人々にインパクトを与えることのできること、また、多数の日本人が知っており、外国の人々と日本の人々との間で共通の話題となり得ること、という二つの条件を重視して検討を行い、最終的に『セメント樽の中の手紙』を選んだ。

最後に、このプロジェクトを実施するにあたっては、多くの先学の学恩[5]にあずかった。記して深謝申し上げる。

年、551～552 頁）を参照した。

[4] いずれも、石川巧「「あなた」への誘惑－葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」論－」（『山口国文』19 号、1996 年」）に見られる指摘である。

[5] 葉山嘉樹の生涯及び書誌全般について、『浦西和彦著述と書誌　第 3 巻「年譜　葉山嘉樹伝」』（和泉書院、2008 年）をはじめとする、浦西氏の一連の論考及び考証を参照した。